

黒猫彼氏

目次

黒猫彼氏

5

飼い主彼氏

259

黒猫彼氏

——わたしが願ったことはただ一つ。愛する人と幸せになりたい。それだけです。

ゆうに百四十畳はある大広間に設えられた高砂に、雛人形よろしく座っているのは若い新郎新婦。花嫁は恥ずかしがっているのか、綿帽子を深く被ったまま顔を上げようとしない。一方、面長の薄い顔立ちで、丸縁眼鏡をかけた新郎は、ひっきりなしに注がれる参列客からの酒を、顔色一つ変えずに飲み干していた。

二人の後ろには、松と鶴が描かれた、それは見事な金屏風が飾られている。座敷には大勢の人が集まり、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎだ。

だがその一角で、冷めた目をしている者達がいる。

『ふん。西洋かぶれの成金が。女と爵位を手に入れて、我々と肩を並べたつもりか。貿易商ごときが凶に乗りよって』

『貧乏農家の五男が、今では軍御用商人ですからね。なんでも先の戦争で大儲けをしたとか。しかしまあ、男爵もよくこのご結婚をお受けになったもので。目に入れても痛くない一人娘のように、

これでは売ったも同然じゃありませんか』

『そうせざるを得なかったでしょうよ。あそこも内情は……』

侮蔑とやつかみの声が聞こえたのか、俯いた花嫁の表情に影がさす。彼女の隣にいた新郎が、酒を飲みながらぼそぼそと独りごちた。

『やれやれ。俺が買ったのは爵位で、女はおまけについてきただけなんだが……』

それを聞いた花嫁の顔が、みるみるうちに血の氣を失っていった。それでもじっと耐え忍ぶ姿が、いじらしいを通り越して哀れに見える。

男からは、花嫁に対する労りや愛情といったものを微塵も感じない。興味のない置物を隣に置いて、ただ酒を飲んでいただけだ。

ふと気付くと、高砂も参列客も消えていた。

代わりに目の前に広がっていたのは、広々とした洋間。窓辺で女性が一人、揺り椅子に座っているのが見える。先ほどの花嫁だった。

彼女は小花の散った美しい着物を着て、ウェーブがかかった髪を、大きな洋風簪で纏めている。

その膝の上では、一匹の黒猫が丸くなって眠っていた。彼女は黒猫の背中を優しい手つきで撫でながら、ゆっくりと椅子を揺らしている。

辺りには、しっかりと煉瓦造りの暖炉、そして重厚な色合いの応接セットや、豪華な飾り物で溢れかえったサイドボードがある。天井からつり下がる、花模様の傘が美しいシャンデリア。大きな窓には、まばゆい白のレースカーテンがかかっている。窓の外に広がるのは、英国式の庭。その

中で、和風な装いの彼女は浮いて見えた。

物はたくさんあるのに、人がいない。彼女はこの部屋で一人ぼっちだった。いや、正確には黒猫が一匹、彼女に寄り添ってはいるが。

『クロさん、クロさん。今日の晩ご飯は何がいいかしらね。あなた鯀はお好き？』

ふと彼女が話しかけると、黒猫は耳をピクピクと動かして、短い尻尾をゆつくりと左右に振った。短毛短尾の純日本猫で、何ものにも染まらない漆黒の毛並みを持つ彼の姿は、凛々しいの一言だ。とても賢い子で、まるで人間の言葉が全部わかっているかのように反応する。

『あなたがいなかったらわたしはここに一人ぼっちね。一人じゃせつかくのご飯もおいしくいただけないわ。ありがとうね、クロさん』

と、そこに、外から話し声が聞こえてきた。庭を横切るように、彼女の夫と若い女性が並んで歩いている。その様子は親しげで、二人が男女の関係にあるのは明らかだ。

その二人を見た彼女は微かに表情を強張らせると、立ち上がってカーテンを閉めた。彼女の膝から飛び降りた黒猫が、心配そうに足元をうろつく。彼女は必ずするとその場に座り込むと、彼を抱きかかえた。

『みゃー』

いつの間にか顔を上げて彼女をじっと見ていた黒猫が、着物の胸元を前足で突いてくる。彼女が抱き上げて頬を寄せると、彼は鼻の頭をちよんと付けて、懸命に首筋に胸にと自分の頭を擦り寄せた。そして最後に、ザリザリの舌で彼女の目尻に浮かぶ涙をべろりと舐めたのだった。

1

「……………うう……………なんかまたあの変な夢見たあ〜」

南城小町は寝ぼけ眼を擦りながら、うるさく鳴り響くスマートフォンのアラームを止めた。朝九時だ。実家ならば、「いつまで寝てるの、だらしない」と、母親にお小言を食らってもおかしくないが、そこは一人暮らし。なんの束縛もありはしない。

小町は背中の中程まである黒髪を、手櫛で梳いた。

あの夢を見るのはもう何回目だろうか。

まるで、テレビや映画の中のような、時代がかった世界。

祖母が朝の連続テレビ小説が大好きな人で、子供の頃は小町も一緒にあって見ていた。きっと祖母と見ていたドラマたちによる記憶の欠片が、夢になってポロポロと出てきているのだろう。

小町は子供の頃から、よくこの『変な夢』を見ていた。

——お金持ちの男の人に嫁いだ女の人が孤独に泣く夢。夫となった人に見向きもされず、彼女は広い洋館で黒猫を可愛がって生きているのだ。その女の人の容姿が自分に似ているのが若干引つかからないでもないが、よく見るといっただけで、別にこれと言って実害はない。そういうわけで小町は、この『変な夢』を頭の端に追いやった。

むくりと起き上がって、ベッドの上で四つん這いになる。昨日の夜読んでいた求人雑誌とハローワークの求人票の束が、猫足のちゃぶ台の上に雑然と広がっているのが視界に入った。ソレから意識的に視線を外し、枕に顔を押し付けて、「はあ〜」とため息をつく。

そのため息の重いこと重いこと……

小町はただいま絶賛失業中。ハロワ通いも板に付き、SNSに『ハロワなう』と書き込むのも二秒とかからない。なにせ、ハ行の予測変換第一候補がハロワである。カレンダーが何曜日を示そうと、小町にとっては毎日が日曜日同然だ。

(いやいや、明日は面接があるから日曜日じゃない……いい加減仕事決まないとヤバイ……)

二十三歳、独身、彼氏ナシ(というか彼氏がいた例すらナシ)で、絶賛失業中。何も好き好んでこんな辛気臭いプロフィールになったわけではない。つい最近までは、二十三歳、独身、彼氏ナシ、大手飲食系企業正社員という、多少はマシなプロフィールだった。しかし、もともと経営状態がよろしくない会社に入ってしまった、就職からわずか九ヶ月で倒産してしまったのだ。新卒というかけがえのないゴールデンバッジと、ビミョー過ぎる職歴を交換する羽目になって二ヶ月半が経過。手当たり次第に履歴書を送っているのだが、面接に辿り着いたのはたった数社で、未だ採用はされずといった具合だ。失業保険給付期間終了が目前に迫り、このままでは実家への強制送還も免れない。

とは言っても、小町が一人暮らしをしているこのマンションは、実家からそう遠くない。本来は一人暮らしをする必要もないのだが、実家は小町にとって窮屈な檻なのだ。

心配性で超過保護な銀行員の父親と、お節介で押し強い専業主婦の母親の組み合わせのもとで、一人娘の小町はレールの敷かれた真っ直ぐな人生を歩んできた。

この一人暮らしだって、本当はものすごく反対されたのだ。それを就職を機にと、小町は説得しまくった。そうしてようやく許してもらった新居は、実家から電車でたったの三駅。オートロック付きの二十四時間有人監視、女性専用という超過保護マンションである。

そんなセキュリティのうえに部屋が三つもあるから、家賃が高い高い。みるみるうちに貯金が目減りしていく。一人暮らしなのだからワンルームでいいものを、「ここ以外の物件に住むなら保証人にはならない」だなんて親に言われ、額くほかなかったのだ。

(猫ちゃんと一緒に暮らせるマンションに引越したい。ああ〜猫ちゃん猫ちゃん飼いたい……) 自分一人でも危うい生活のくせに、悠長に猫なんて飼えるものか——そうわかってはいても、小町は猫が飼いたかった。

子供の頃から猫好きだったのだが、母親が動物嫌いかつ猫アレルギーで、飼うことができなかつたのだ。だから一人暮らししたら猫を！と意気込んでいたものの、親の許可が下りた物件は、前述した通りの超過保護マンション。ここはペット禁止なのだ。

(まあ、無理だよねえ……一人暮らしを許してもらっただけでも奇跡なんだから)

猫と暮らすことは将来の夢としておいても、今、実家に強制送還されるわけにはいかない。実家に帰ってしまえば、次はいつ一人暮らしを許してもらえるかわからないではないか。なんとしても新しい仕事を見つけて一人暮らしを継続し、そしてラブキャット生活への資金を貯めるのだ。

小町は「えいやッ」と気合いを入れて上体を起こすと、ちゃぶ台の上の求人票が目に入らないようにしながらベッドから下りた。

起き抜けの紅茶はダージリンに限る。小町は母親のイギリス土産である茶葉を、食器棚から取り出した。ちよつと濃い目に淹れたダージリンをちびちびと飲むのが、失業してからの小町の習慣だ。悲しいかな、時間だけはたくさんあるから困る。

昨日焼いておいたチョコチップ入りスコーンを皿に移していると、枕元に置きっぱなしにしていたスマートフォンが着信を告げた。

電話の主は間宮梓。女子大時代の同級生で、一番の友達だ。小町のマンションから徒歩二十分のところに住んでいる。

「もしもし？ おはよ、小町。起きてた？」

「おはよ。うん、起きてたよ。どうかした？ 梓は今日休みだったっけ？」

今日の梓の声は、やや早口で、どこか落ち着きのない印象だ。彼女はよく電話してきてくれるが、これほどそわそわしていることはない。何かあったのだろうか？

「うん。休みのなの。小町は今日暇かな？」

小町が「暇だよ」と言うと、彼女は声のトーンを少し上げた。

「あのね、どうしても行きたいところがあるんだけど一人じゃ緊張しちゃって……。小町に付き添ってもらいたい。お願い！」

梓はインドアタイプだ。外出は仕事と家の往復のみで、買い物も通販で済ませてしまうようなと

ころがある。だから梓と会う時は、彼女の家でのんびり……ということが多かった。そんな梓がどうしても行きたいところとはどこだろう？ そこに興味もあつたし、彼女が自分を誘ってくれたのも嬉しかった。

「いいよ。どこに行くの？」

「三笠港駅の近くにある、占いの館なの」

「占い？」

予想外の答えに、小町は小さく眉を寄せた。

占いが目的というのは少々意外だ。だが、小町は快く引き受けた。今日はすることもなく暇だったのだ。

「いいよ。じゃあ、十一時に西川駅で待ち合わせしよっか」

「うん！ ありがとう！」

家の最寄り駅で落ち合う約束をして、電話を切る。スコーンを手早く胃袋に収めると、軽くシャワーを浴びて出掛ける支度をした。

今は三月の半ば、桜の開花シーズン真っ只中である。窓の外は明るく、天気もよさそうだ。

去年の今頃買ったのはいいものの、あまり着ることもなく仕舞っておいたボウタイのブラウスを取り出した。ボルドー系の色合いのそれは、黒のリボンと袖口のレースがガーリースタイルで気に入っている。下には白のチュリーリップカットのスカートに合わせて春を演出。長い黒髪を白のシユシユで無造作に括り、ナチュラルメイクを施せば完成だ。

オフホワイトのスプリングコートを羽織った小町は、シヨルダーバッグを片手に家を出た。

西川駅で梓と合流して軽くランチを食べたあと、三笠港駅に降り立った。

人通りの多い賑やかなところで、よく手入れされた街路樹の桜が、惜しげもなく咲いている。

「いつも電車で通り過ぎるだけの駅だったから気付かなかったけど、意外と人が多いね」

「そうだね。わたしも滅多に来ないから、ちよつとびつくり」

隣を歩く梓も、辺りを見回しながら頷く。彼女は持ってきていた雑誌を開いて、小町に見せてきた。丁寧に折り目まで付けてある。彼女が行きたいと言っていた占いの館には、テレビでも紹介されたこともある評判の占い師がいるらしい。占いの館は、駅から徒歩五分ほどのところにある雑居ビルの三階だと書いてあった。

「梓って占い好きだったっけ？」

歩きながら尋ねる。

梓とは大学入学時からの付き合いだから、もう五年ほどになる。だが、彼女が占い好きだという記憶はない。

「ん〜好きってほどじゃなかったんだけど、ここ当たるって評判なの。同じ職場の子もここでみてもらって、当たってたって言ってたんだ。だから私もみてもらいたくって」

「何をみてもらうの？」

そう聞くと、彼女はちよつと恥ずかしそうに俯いた。

「……………えっと……………恋占い、かな。今、好きな人がいて……………」

「ええっ!? そうなの? 初耳だよ〜」

それならそうと、もつと早くに言ってくればよかったのに。そうしたらランチの最中にトコトノ尋問しただろう。

「誰、誰? どんな人? 梓の好きな人って!」

好奇心満載で迫ると、彼女は周りを気にする素振りを見せながらも、こそつと耳打ちしてくれた。「あのね、職場の先輩なの。稲森さんって……………優しくってかっこいいの」

彼の名前を口にするなり、彼女は手持ちの雑誌で顔を隠した。前下がりの隙間から、真っ赤になった頬が覗いている。その仕草が本気で可愛らしい。

梓は小柄だが、同性の小町から見てもスタイルがいい。今着ているバックプリーツニットも大人可愛くてよく似合っている。それに彼女は真面目だし、趣味は手芸と料理という、とても女性らしい性格の持ち主だ。そんな彼女から好かれていると知ったら、稲森さんとやらも悪い気はしないだろう。「占いなんかしなくたって、そのままアタックしちゃえばいいのに」

「そんなの無理! だって、稲森さんにどう思われているか、まったくわからないもん。仕事以外で接点なんてないし……………。それに稲森さんってすごく真面目な人なの。プライベートのことか一切話さないし、告白なんかしたら職場に何しに来てるんだって思われちゃうかも……………」

梓の仕事は大学病院の医療事務だ。忙しい職場だと聞いている。シフト制でもあることだし、も



しかすると意中の人と話す時間があまりないのかもしれない。

「だから占いで、どうしたら稲森さんと仕事以外でお近付きになれるかなって……聞きたいの。この占いの館って、恋愛専門なんだって」

占いで、そんなことまでわかるものなのだろうか？ 占いを積極的（がた)に信じているとは言い難い小町は、内心首を傾（か)げていた。だが恋に一生懸命になっている様が可愛くて、無粋なことを言う気にはなれない。

「すごいね。楽しみ」

その稲森さんについて聞きながら歩いていると、目的の占いの館が入っている雑居ビルに到着した。

「小町も一緒にみてもらう？ ほら、小町も彼氏欲しいって言ってたじゃない？ いつ出会うのかとか占ってもらえるかも。小町は美人なんだから、出会いさえあれば、あとは簡単だと思うの」

小町は肩を竦（すく)めて苦笑いした。彼女は美人だと言ってくれたけど、小町は男の人に告白されたことがない。話しかけにくいと言われたことならある。愛想が悪いのかと笑顔を意識してみたら、ナンプのような喜ばしくない声かけが増えただけだった。

「ううん。わたしはやめとくよ。今のわたしに必要なのは彼氏じゃなくて就職先なんだもん」

彼氏は欲しいが、それ以上に欲しいのは仕事だ。それに悲しいかな金欠でもある。だが就職先や時期を教えてください占いなら、やってみたいかもしれない。

「いい仕事、見つかりそう？」

心配してくれているのだろう。梓が少し眉を下げる。それに対して小町は歯切れの悪い返事をするしかなかった。

実際、戦局はよくない。再就職活動をして三ヶ月になるのに一向に仕事が決まらないのだ。これは小町の予想を大きく超えていた。

自分はまだ若いし、性格は真面目だと自負している。職を失ったのも会社都合だ。次の仕事はすぐに決まるはずだと思っていたのだ。しかし、現実はまだ無職である。

「ん……まあ、うん……一応明日面接……」

「そうなんだ！ 頑張ったね。どんな仕事なの？」

「大きめの花屋さん。いい加減、仕事決まらなないとね……実家戻りたくないし……」

「ああ……うん……小町の家、超過保護だもんねえ……」

梓は小町の母親と何度か顔を合わせたことがある。マシンガントークで小町の交友関係を探る母親を知っているせいか、彼女はこれ以上話を広げてこなかった。

気を使わせてしまつて悪いなと思いつながら、無言のまま雑居ビルのエレベーターに乗って、占いの館がある三階まで上がる。三階の床は赤い絨毯（じゅうたん)が敷き詰められており、壁にはスパンスールの付いた黒い布が掛けられていた。普段の生活では馴染（なじ)みのない雰囲気驚いて、小町は自分が占ってもらわなくてもないのに少し身構えてしまった。なんの匂いかはわからないが、鼻孔（びらな)に残る、花のような匂いがする。

木製のドアを開けると、いきなり白い壁に囲まれた小窓に出迎えられた。小窓の奥には人がいる

ようだが、窓が異様に小さいのと、位置が腰辺りと低いために顔は見えない。

壁には『本日出勤の占い師』と書かれており、ちょうど十枚の顔写真があった。占い師は男の人が一人で他は女性だ。どうやらこの小窓が受付で、客が占い師を指名するシステムらしい。

黒いカーテンで仕切られた部屋の向こうからは、ぼそぼそとした話し声がする。先客だろうか。姿が見えないから実際にどれぐらいの人で賑わっているのかよくわからなかった。

「すみません、アンジュ先生にみていただきたいんですが」

小窓に向かって梓が話しかける。

「アンジュ先生は今ちようど空いています。そのままカーテンの奥にお進みください」

「わかりました」

梓は振り向くと、小窓の斜め向かいにある長椅子を指差した。

「待ち時間なしだった。ラッキー。ドキドキするけど行ってみるね。小町はそこで待っていてくれる？」

今は誰もいないが、おそらくは指名した占い師に先客がいた時用の簡易待合室だろう。長椅子が三脚と自動販売機がある。

「うん、わかった。あ、雑誌貸してもらっていい？ 読みながら待ってるから」

小町は梓から雑誌を受け取り、小さく手を振った。

「いってらっしゃい」

「うん。行ってくるね」

小町は椅子に腰掛け、借りた雑誌を読みはじめた。この地域の特集誌ということで、見覚えのある地名や店名が並んでいる。

前から順番にページをめくっていた小町の手がふと止まった。

(猫カフェ)

可愛いちゃんこたちが戯れる写真が全面に押し出されている。愛くるしいその瞳に吸い込まれるように、小町の目はページに釘付けになった。この猫カフェは、どうやら自宅マンションの最寄り駅近くにあるらしい。普段の買い物をする店には詳しくなかつたつもりだったが、猫カフェがあるとは知らなかった。

天井の一部にアクリル板を張っており、そこを猫が歩くと下から肉球が見えるという「肉球ロード」なる設備があるとのこと。過去に何度か猫カフェに行ったことはあるが、そんな珍しい設備があるカフェはなかった。猫好きとして、これは行かなくてはなるまい。

小町が自分のスマートフォンで猫カフェのページを写真に撮っていると、不意に雑誌に影が落ちた。

「あのオ……少しいですか……？」

暗くゆつたりとした声で話しかけられ、驚いて顔を上げる。するとそこには、頭から黒いレースのショールを被った妖しい雰囲気的女性が立っていた。長い前髪で表情が見えない。それに酷い猫背で、年配者のような雰囲気だ。声はまだ若かったけれど。

彼女は袖の中から名刺を一枚差し出してきた。

「突然すみません。私はこの見習い占い師で、ボアラと申します。いきなりで申し訳ないのですが、占いの練習に付き合ってもらえませんか？ もちろん、練習なのでお代はいりません」

その名は、さすがに本名ではないだろう。そういえば、梓が指名した占い師もアンジュという名前だったわけ。占い師も芸名のようなものを使うのが一般的なんだろうか。そんなことを考えながら、小町は笑顔で頷いた。

「いいですよ」

練習らしいし、軽い人助けのような気持ちだ。

「私は今、前世透視で良縁をみる占いを練習しています。だからそれをやらせてください」

同じ長椅子の隣に座ってきたボアラは、先ほど以上に妖しげな雰囲気を出しながら言った。

「前世透視？ えっと、それはつまり、いわゆる前世占い、というやつですか？」

「そうとも言います。袖振り合うも多生の縁と申します。現世で結ばれる方は、前世でも少なからずご縁があるのです。出会うべくして出会ったと言っても過言ではありません。前世を通すことで魂の結びつきを見ることができるようなのです」

「は、はあ……魂の結びつき……」

つまりは、輪廻転生のような生まれ変わりによる縁を占うということなんだろう。問題は本当に生まれ変わりとあるのか、だが……前提を覆すようなことを言うのはナンセンスだ。

小町の生返事を、ボアラは気にした素振りも見せずに、書類ばさみにはさんだ白い紙と、ボールペンを差し出した。

「ここにお名前と生年月日を書いてください」

「あ、はい」

さらさらと書いて紙をボアラのほうに向けると、彼女は大きく深呼吸をした。

「ありがとうございます。南城さん——南城小町さん。では始めますので手を握らせてください」

言われるがまま右手を差し出すと、彼女は両手でそれを握ってきた。そして目を閉じる。集中しているのか、彼女は丸い背中を一層丸くして下を向いた。

「……あなたの前世はとても身分の高いご令嬢です」

「おお〜すごい」

声は抑えたものの、小町は自分の頬が緩むのを感じていた。

ちよつと嬉しい。とりあえず、前世は人間だったらしい。ゴキブリとかじゃなくてよかったという安堵もある。しかもいいところのお嬢さんだなんて、やるじゃないか前世の自分。

「日本の……明治、いや、大正？ すみません。ちよつと詳細はわかりませんが、その辺りの時代に生きておられたようです。大きな会社を経営なさっている旦那様と結婚されましたね。ん……しかし……夫婦仲は良好とはいえなかったようです」

それはよくない。前世の話とはいえ、幸せな家庭を築いていたかったのに。

「どうして仲が悪いんですか？ 喧嘩でもしてるんですか？」

小町の質問に、ボアラはゆっくりと首を横に振った。

「いえ、喧嘩による不仲ではありません。旦那様は他にお妾さんがいらっしやるようです。奥様

であるあなたには根本的に興味が無い……むしろ嫌っていらつしやるのです。時代的に、お見合い——政略結婚の可能性もありますから、致し方ないことかもしれませんね……。現代の感覚で語ることはできないとは思いますが、今でいうと家庭内別居のような感じで、ほとんど顔を合わせない生活と言えればわかりやすいでしょうか」

「なるほど……」

つまり、愛のない結婚だったのか。愛もなく結婚しなくてはならないなんて、昔の人は大変だ、などと人事じんじのように思う。

しかし、どこかで聞いたことのある話のような気がする。

(うーん。どこで聞いたんだっけなあ?)

どうにも思い出せない。

「でも、暮らしは豊かですよ。豪華な洋館に住んでいらつしやるように見えます。しかし、周りに人が見当たらないのが気になりますね」

ポアラはますます猫背を酷くして、握った小町の手を自分の額ぬかに当てた。

「ああ……寂しいという気持ちを強く感じます。前世のあなたはとても孤独な生活を送っておられたようです」

「……」

何か引つ掛かるものを感じて、小町は無言になってしまった。

——妻に興味が無い夫。妾。家庭内別居。洋館に一人。

喜ばしくない単語の羅列られつが、小町の記憶を刺激してくる。

暮らしぶりは悪くないのに、寂しい思いが消えない孤独な生活。

しばらく考え込んでいた小町だったが、突然気が付いてしまった。ポアラの言う自分の前世は、今朝見た夢とあまりにもそっくりなのだ。

(う、嘘でしょ? あれって、前世の記憶だったの? えっ、いや、まさか、そんな……)

しかし、こんな偶然があってもいいのだろうか? 今まで何度も見たことのある夢だったが、誰にも話したことはない。それをこの見習い占い師が知っているはずはないのだ。

ただどこあまりにも夢と合致しすぎていて、彼女が適当に言っていると断言するほうが横暴に思えてくる。ポアラには何か特別な力があるのだろうか?

(いやいやまさか! 占いつてというのは、それらしいことを並べるものなんですよ? ご令嬢の政略結婚だなんてよくあることだろうし……そうだよ、よくある、よくある……よね?)

そうだ。よくある話だ。過去の文献にも残っているし、映画でも漫画でも小説でもよくある設定だ。

動揺する小町をよそに、ポアラは淡々と言葉が続けてきた。

「ああ、でも前世のあなたは結婚後に猫を飼いはじめていらつしやいます。黒猫です。旦那様は猫を不衛生だと仰おぼつていて、気に入らなかつたようです。しかしあなたはその猫をととても可愛がっていて、猫と二人で生活しているような状態だったようですから、完全な孤独とはまた違ったかもしれませんね」

黒猫！ もうすべてが夢と同じじゃないか。これはいよいよ、あの夢は前世の記憶！  
心当たりのあることをズバズバと言われて、動揺している自分がいる。

彼女が本当に前世が見えるのであれば、あの夢の続きを教えてほしい。夢ではまだ見ていないだけで、あのあと幸せになったという可能性だってあるかもしれないじゃないか。

ドキドキしながら続きを待った。

「飼い猫が寿命で亡くなった後、生きる気力を失ったあなたは、風邪をこじらせて肺炎にかかり、三十二歳の若さで生涯を終えられました。前世ではとにかく男性に無縁の一生だったようです」

一気に心が萎える。

（終わり!? 前世のわたしの一生もう終わり!? ちょっと早くないですか!? ラブロマンスはなしですか!?)

そこはもう、夫がある身でありながら、庭師とか書生とか使用人とかといった素敵な殿方と想いを通わせる——そういった身分差も盛り込んで、身を焦がす禁断の恋なんていう、ドラマティックな展開を用意しておいてくれてもいいじゃないか。何もなしで肺炎で死亡だなんて、あまりにも悲しすぎる。

「……えっと、つまり、前世のわたしは、夫に振り向いてもらえず飼い猫に依存する、『猫だけが生きがいの非モテ女子』、ってことですか!?’

思わず声を出して、次の瞬間にはハツとした。今とそうたいして変わらないじゃないか。いや、むしろそのほうが悪くなっているかもしれない。夫に振り向いてもらえなくても、前世の自分は結

婚という永久就職をしている。にもかかわらず、今現在の自分は、失業者。無職である。しかも、嫁にもらってくれるアテもない。

非モテはしようがなくても、無職は努力でどうにかできるはずだろう。と、いうかどうにかしかなくては、今後の生活が立ち行かなくなる。彼氏どころの話じゃない。実家に強制送還だ。

(……しゅ、就職活動頑張らなきゃ……うん……)

露骨に肩を落とした小町を慰めるように、ポアラは続けた。

「安心してください。前世でそうだったからといって、現世でもそうなるとは限りません。あなたにはちゃんと出合いの相が出ていますよ」

「ほ、本当ですか!?’

思わず声を上げていた。

出合い!? 二十三年間彼氏ナシの生活に、遂に終止符が打たれるのか!? 自然と期待が高まる。

「はい。あなたは前世で縁があった方と現世で結ばれます。前世では悪縁に阻まれて結ばれることはなかったお二人ですが、現世では必ず。とにかく相手の方の想いがとても強いのです。あなたのことを幸せにしたいという想いが。ああ……なんて一途な方なのでしょう……時を超えてもあなたを想っておられる」

占いは所詮占いじゃないか。他人が勝手に言うことなんて、そうそう信じられるものじゃない。と、心のどこかで思いながらも、小町は自分にとって都合のいいところだけを信じようとしていた。

自分には出合いがある。しかも自分のことを想ってくれている人——その部分だけを。

「いつですか？　いつ、その人と出会いますか？」

やや興奮して身を乗り出すと、ボアラは逆に身を引いた。

「た、たぶん……年内には……」

年内とはこれまた大雑把だ。今はまだ三月。一年は始まったばかりじゃないか。何月何日とまでは言わないから、せめて季節や出会う場所のヒントなんかをもらえると非常にありがたいのだが。しかしこの占いはボアラの練習なのだ。見習い占い師である彼女には限界があるのかもしれない。

「年内……そうなんです。ありがとうございます。楽しみです！」

前世から縁のある人だなんて、まるで『運命の人』みたいじゃないか。

小町だつて年頃の女だ。自分には『運命の人』がいるだなんて言われれば、そわそわしてしまうのも致し方ない。

小町が期待に胸を膨らませて微笑むと、ボアラは握っていた手を離した。

「あなたは今でも猫がお好きのようですね。ああ、さつき雑誌の猫を写真に撮っていたらしたので、勝手にそう思ったんですけれど」

ここで初めて彼女が顔を上げた。前髪の間からちらつと目元が覗く。やっぱり若い女性だ。目元の肌にははりがある。小町と歳も変わらないように見える。色白で、頬に少しそばかすがあった。彼女は元から低い声のトーンを更に低くした。

「……猫は絶対に飼わないほうがいいですよ。せっかくの男運が下がってしまいます。前の旦那さんも猫はお好きじゃないようでしたから。猫はあなたにとつての鬼門です」

「えっ!？」

にやんどいうことだ。好きで好きでしようがない猫が鬼門だなんて。

「あなたはお相手を間違わなければ必ず幸せになれる方なんです。猫で躓いてはいけません」  
思いもよらない言葉に戸惑っていると、カーテンの向こうから梓が出てきた。

「お待ちせ、小町」

「梓！　う、占いはもう終わったの？」

小町は咄嗟に立ち上がった。

「うん！　終わったよ。それで今から買い物に行きたいんだけど。買い物も付き合ってもらっていいかなあ？」

「買い物？　うん、もちろん一緒に行くよ」

小町は挨拶しようと、ボアラのほうに視線をやった。

だが、彼女はもうそこにはいなかった。

「占い、何かいいアドバイスもらえた？」

占いの館を出たところで、小町は梓に尋ねた。占い師に何を言われたのか、館を出てからの彼女はとても嬉しそうだ。

「うん！　私、ジムに通ってみる！」

「えっ、ジム？」

予想外の答えに思わず聞き返すと、梓は占いの詳細を教えてくださいました。

もともと、梓と彼女の想い人である稲森さんとの相性はいいらしい。ただ、いまひとつ決め手に欠けている。そこでジムに通って身体を鍛えると、稲森さんのほうからアプローチしてもらえるのだと、占い師が言ったそうなのだ。

「……それって稲森さんは……筋肉ムキムキの女性が好きってこと？」

言い表せない不安に駆られてしまう。確かに筋肉質の女性が好きな男の人もいるだろうが、梓は本当に女性らしい柔らかな雰囲気の子なのだ。筋肉質の女性とは対局のところにおいて、あまりにもイメージが違う。

「それはわからないけど、ほら私って運動不足じゃない？ 健康のためにもジム通いつて悪くないと思うの」

「そ、そうかもしれないけど……」

梓はすっかりやる気になっている。彼女が付き合ってほしい買い物というのは、ジム用のシューズやウェアなのだそうだ。

（あ、梓ってこんなに行動力ある人だったっけ？）

梓の勢いに押されて、小町は彼女の買い物に最後まで付き合った。

「ありがとう！ 小町!! すごく可愛いウェアが買えたよ〜」

「うん、似合ってたと思うよ。それで通うジムはどこにするの？」

「とりあえず、職場の駅近くにジムがいくつかあった気がするから、覗いてみる」

「そっか。いいところが見つかるといいね」

西川駅で梓と別れた小町は、ふとスマートフォンを出して時間を見た。十八時半。スーパーに寄って帰ろうかとも思ったが、占いの館で梓を待っている時に雑誌で読んだ猫カフェが脳裏をかすめる。

（猫カフェ……行っちゃおうかなあ〜）

猫を飼うと男運が下がるだの、猫は鬼門だのと言われても、好きなものは好きなのだ。否、むしろダメと言われると余計に猫への愛情が募る。

明日は就職の面接があることだし、猫に癒されて英気を養ってもばちは当たらないはず……

撮影した雑誌の画像を見ると、営業時間は二十時までと書いてある。今から行けば、十九時には着くはずだ。それに猫は夜行性。猫カフェに行くなら今くらいの時間がベストである。

（よし、決めた！ 行っちゃおう！）

小町は撮影していた地図を頼りに、猫カフェへと足に向けた。

「いらつしやいませ〜」

十分もしないうちに、西川駅の裏手にある猫カフェに到着した。

小町を出迎えてくれたのは、幼稚園の先生を思わせる可愛らしいピンクのエプロンを着けた、三十代半ばくらいの女性店員だ。

「当店は初めてでいらっしやいますか？」

「はい」

領けば、ラミネート加工された紙を一枚差し出される。

「こちらが当店の注意事項となっております。同意してくださる方のみ入店していただけます」

書いてある注意事項は、飲食物の持ち込みは禁止、寝ている猫を無理やり起こさない、無理に抱っこしない、追いかけて回さない、驚かせないといった、猫カフェとして基本的なものだ。猫を撮影するのは自由らしい。

「わかりました。大丈夫です」

「ありがとうございます。では、手の消毒をさせていただきます。お荷物はこちらのロッカーをご利用いただけます。最初の利用時間は一時間です。延長は十分単位です」

アルコールスプレーで手を除菌される。

小町はスマートフォンだけを手に持ち、ショルダーバッグとスプリングコートと壁に並んだロッカーに入れた。そして二重になったドアをくぐって店内に入る。

二色カーペットが交互に敷き詰められた店内は横に広い造りで、中央にキャットタワーが鎮座していた。ソファは三つ。そしてメインである可愛らしい猫たちが、いたるところに合計十匹もいた。人より猫の数のほうが多い。壁には、このカフェで会うことができる猫スタツフを紹介した、写真付きの手作りパネルが飾ってある。カウンターでは猫のおやつがワンパック百円で販売中。アットホームで、実に雰囲気の良いカフェだった。

（うわぁ〜猫ちゃんがいっぱい〜）

興奮して、思わず声に出したくなるのをぐっと堪える。猫を驚かせてはいけないのだ。

店内では様々な毛色の猫がそれはもう好き勝手にしていた。ある者は籠の中に丸くなって眠り、ある者はキャットタワーを活発に上下し、ある者は店員に甘えて擦り寄る。

小町は自分の顔が緩むのを止められなかった。ここは天国か!? 今すぐあのにゃんこたちの中に飛び込んで、遊んでもらいたい！

小町がにやけ顔で一番手前のソファに座ると、男の人が二人いるのが視界に入った。二人共後ろ姿だったが、一人はさっきの女性店員と色違いのエプロンをしていることから、店員なのが一目瞭然だ。

もう一人はカジユアルスーツを着ている。先客だろうかとも思ったのだが、その人はカウンターにスケッチブックを広げて、男性店員と何かを話していた。

距離があるから話している内容は当然聞こえない。だが、スーツの男の人がスラックスのポケットからメガネを取り出して壁の長さを測り出したところで、小町はさっきの女性店員を捕まえた。「もしかして、改装でもするんですか？」

家の近くにこんな素敵な猫カフェがあるのならぜひとも通いたい。しかし、改装をするのならしばらく休みになるかもしれないと思ったのだ。

案の定、女性店員は少し眉を下げて頷いた。

「そうなんです。猫スペースと喫茶スペースをわけることになって。それで今日は、喫茶スペース



に入れる家具の相談に、家具屋さんに来てもらっているんです」

「ああ、それで……」

ではあのスーツの男の人は家具屋さんなのか。さつきから部屋のあちこちを測って、メモしているのは家具のサイズを決めるためなのだろう。

「楽しみですね」

小町がそう言うと、女性店員が可愛らしい笑顔を見せてくれた。

「ありがとうございます。しばらくお休みになるんですが、そのあとは飲食メニューも増える予定なんですよ。ご期待ください」

「いいですね。あ、猫ちゃんが来てくれた」

足元に、丸い顔に丸い目をしたスコティッシュフォールドがやって来た。耳を可愛くちよんと折っていて、毛は綿あめのようにふわふわだ。小町に興味を持ってくれたのか、わりと物怖じせず  
に近付いてくる。

「かわいい〜」

「この子はトッキーという名前で、二歳の男の子です」

女性店員の紹介を聞きながら、小町はソファから下りてカーペットの上に座った。スマートフォンで、早速写真を撮る。トッキーは小町の膝に前足を乗せて、スマートフォンに付いた猫の尻尾を模したフェイクファーのストラップを目で追っていた。

「あ、ストラップが気になるのかな？」

「そうみたいですネ」

小町がストラップを左右に振ると、トッキーの顔も左右に揺れる。その仕草に悶絶もんぜつしそうになった時、男性店員が女性店員を呼んだ。

「ユイさん。ちよつといい？」

「あ、はい——すみません。ゆつくりしてってください」

「はい。ありがとうございます」

返事をしつつ、小町はトッキーの身体をわしやわしやと撫で回した。両手からほのかな温かさが伝わってくる。彼も小町を気に入ってくれたのか、膝の上に乗ってきた。

(可愛い〜っ。幸せ〜)

どうして自分は猫を飼えないんだろう。こんなに猫が好きなのに。

実家の家族が猫アレルギーで、今住んでいるマンションがペット禁止なのは仕方ないにしても、占いで猫を飼わないほうがいいと言われたのは納得できない。将来猫と暮らすのは、小町の夢なのだ。

(ああ〜猫やっぱいいわ。癒なぐさされる。猫飼いたい。うん、占いなんか関係ない。いつか絶対猫を飼う！)

「猫、いいですよネ」

自分が思っていることとまったく同じことを言われ、驚いて顔を上げると、目の前にカジュアルスーツの男の人がいた。さつきまで男性店員と話していたあの彼だ。足音がしなかったから、いつ

目の前に来たのかも気が付かなかった。

(うわ……かっこいい人……)

背が高いが柔らかな物腰で、威圧感はまったくない。さらっとした黒髪で色白。鼻筋がスツと通っていて美形だ。切れ長の猫目は凛々しく知的で、年は二十五歳より少し上くらいか。ネクタイこそないものの、真面目な仕事人間といった雰囲気か凛々しい男の人から話しかけられて、小町は一瞬息を呑んだ。思わずぼーっと見惚れてしまう。

三ヶ月前まで働いていた会社にも、ここまで顔立ちの整った男の人はいなかった。いや、今まで出会ったどんな男の人よりもかっこいい。

「ね？」

同意を求められ、小町はようやく我に返った。素敵な男の人に急に話しかけられたせいとか、心臓がやたらとドキドキしている。

小町は驚きながらも、少し緊張した笑みを浮かべた。

「そ、そうですね。可愛いし……ほんと……猫は好きです。猫飼いたいけど、ペット禁止のマンションだし、親は猫アレルギーだし、飼えなくて……だから猫カフェに……」

彼は何度か頷いて、アレルギーが置かれた天井を指差す。

「俺も猫好きです。この内装は俺がやらせてもらったんですが、嬉しくて。天井にアレルギー板があるの見えますか？ 猫が歩くと下から肉球が見られるようになってるんです。肉球……堪らないので」

天井にアレルギー板を仕込んで下から肉球を見てやろうなんて、それこそ四六時中、猫のことを考えている人の発想なんじゃないだろうか。見た目はいかにも仕事できますといった感じなのに、彼の頭の中は猫でいっぱいなのかと思うと、そのギャップにやられてしまう。小町はいつの間にかふにやっと笑っていた。

「雑誌で見ました。だからこのカフェに来たんです」

「あ、そうなんですか？ ありがとうございます。嬉しいです」

彼はぺこっと会釈をして、「やっぱり目玉になる設備は有効なんだなあ」なんて独りごちている。彼が小町に話しかけてくれたのは、一種の顧客調査のようなものだろう。

「猫、本当にお好きなんですね」

「ええ。好きです」

彼は小町の膝の上で丸くなっていたトッキーの首元を撫でてきた。しかし、トッキーは目を片方開け、じっと彼を見たかと思ったら、スツと立ち上がって小町の膝から下りてしまう。

「……男に撫でられると逃げるなんて、君は女好きなのか……」

トッキーに逃げられたのがショックだったのか、真顔でそんなことを呟く彼がおかしくって堪らない。笑ってはいけなそうも笑ってしまう。小町が口元を隠しながら肩を小刻みに震わせていると、彼がふわっと微笑んだように見えた。

「あなたはどんな猫が好きですか？」

「どんな猫……う、うーん。改めて聞かれると、どんな……というのはいないですね。みんな可愛い

です。猫が側にいてくれると、こう……落ち着くというか。ほっこりするとか。うまく答えられなかったが、彼も明確な答えを求めていたわけではないようだ。

「わかります。見ているだけで心が安らぐ存在ってありますよね。ああ、隣に座ってもいいですか？」

「え？ ええ、どうぞ」

彼はストンと小町の隣に腰を下ろした。急に隣に来られたが、嫌な気はしない。

「ここ、よく来られるんですか？」

「いえ。初めてで……」

二人で並んで話していると、男性店員が近くにやって来た。

「柴崎さん。やっぱりさつき提案してもらった棚をお願いしようかな」

「はい、わかりました。ありがとうございます。搬入の日程が決まりましたら改めてご連絡します」

「じゃあ、よろしく。——そちらの綺麗な人はお知り合い？」

綺麗な人だなんて言われて驚いていると、彼——柴崎は小さく首を横に振った。

「いえ。初めてお会いした方です。ちよつとお話しさせてもらっていただけで」

「ああ、そうなんだね。今日は他にお客さんもないし、ドリンクサービスしますよ」

「あ、すみません。ありがとうございます」

なんだか店の人に気を使わせてしまったようで申し訳ない。小町が頭を下げると、男性店員は人

の良きそうな笑みを浮かべた。

「気にしないでください。柴崎さんが話してるから知り合いなのかと思っちゃって。ゆっくりしていつてください。もう打ち合わせは終わったし、柴崎さんも時間があるならゆっくりしてって」

「どうも」

先ほどユイさんと呼ばれていた女性店員が、アイスコーヒーを持ってきてくれる。それを柴崎と並んで飲みながら猫の魅力について話しているうちに、小町はなんだか不思議な気持ちになつていった。

(……この人、クールなのかな……あんまり笑わないけど……素敵な人……なんだか落ち着く)

柴崎はあまり表情を変えないタイプのような。笑ったように見えたのはさつきの一度だけである。しかし、声のトーンが柔らかいお陰で、きつい印象はない。猫たちに向ける視線も優しさに満ちている。

彼は本当に猫が好きなんだろう。店にいる猫の種類を全部当てたり、背中が白くてお腹が黒い猫はほとんどいないなんていう雑学的なことまでよく知っていた。

「猫の髭が生えているあのふっくらしたところが堪らないっていうひげぶくろ派と、ピンクの肉球こそが最高だつていう肉球派がいるというんですが、俺は断然肉球派ですね」

「アクリル板を天井に設置してしまうくらい？」

「そうです。ま、本当は全部好きなんですけれどね。香箱座りをしてる時の猫の足も絶妙ですよ」

「あゝそれわかります！ 器用に折りたたんでますよね。それに狭い箱の中にも綺麗に入っ

ちゃったり!」

「箱を見たら入らないといけないうって、DNAに刻み込まれているんでしょうね。ん？ 壁一面をボックスで造ったら猫的にはどうだろう。人間が使う棚は扉付きにするとか……ちよつと考えてみようかな」

猫という共通の話題があるせいか、自然と会話が弾む。気が付くとあつという間に入店から一時間経っていた。

「あ。そろそろ帰らなくっちゃ」

小町が猫のおもちゃを置いて立ち上がると、柴崎はゆっくりと顔を上げた。どうやら彼は猫によつて人間椅子にされ、動くに動けないようだ。あぐらをかいた上に三毛猫を乗せて、じつと小町を見つめてくる。首を傾げた時、彼の綺麗な黒い前髪がさらりと流れたのが印象的だった。

「……もう、帰るんですか？」

表情は大きく変わらないまでも、その残念そうな声に少し後ろ髪を引かれる。でもそこは気にしても仕方がない。何せ彼とは今日初めて会ったばかりなのだ。確かにいい人だし、さらさらの黒髪や声のトーンなんかちよつと好みとは思うが、これ以上の距離を踏み込むのはさすがに躊躇われる。それ以前に、男性経験のない小町には、どう距離を詰めればいいのかわからないのだけれど。

「はい、買い物もあるので。お話できて楽しかったです。ありがとうございます」

小町がべこりと頭を下げると、彼もまた同じように頭を下げてくる。

「いえ。俺も楽しかったです。また——」

「ええ、また——」

また——とは言いながらも、次に会う約束はしなかった。彼は仕事でこのカフェに来ていただけ。小町も常連ではなく初めて来ただけ。再会の可能性は限りなく低い。「また」というのが社交辞令にすぎないことはわかりきっている。

料金を払った小町は、振り返って柴崎と店員、そして猫たちに向かって小さく手を振ると、猫カフェをあとにした。

スーパーで買い物をして帰り、シャワーを浴びて晩ご飯を作る。今夜のメインはサーモンのタルタルホイル焼きだ。

アルミホイルに塩コショウをした生鮭なまざけを置き、上からタルタルソースとピザ用チーズをこれでもかと乗せ、グリルで十五分ほど焼けばでき上がりというお手軽料理だ。ホイル焼きと同時に、カボチャ、キャベツ、ベーコンをコンソメで煮込む。こちらは一日目を煮物に、二日目をスープにして食べるとおいしい。

料理は嫌いじゃない。母親がお嫁に行った先で困らないようにと、料理と掃除だけはきっちりと仕込んでくれたのだ。腕を振るう相手がいないのが悲しいところだが。

「ごちそうさまでした、っと」

残った料理を冷蔵庫に入れて洗い物をしていると、スマートフォンが着信を告げる。

今日はよく電話がかかってくる日だ。また粹だろうか？

「はいはいはい、ちよっと待ってね。今出ます」

タオルで手を拭きながら、画面をちらっと見た。そこに出ていた名前に「ゲッ」と思いはしたものの、しどろしどろ電話に出る。そして耳に入ってきたのは、スマートフォンを遠ざけたくなるくらいの大声で――

「遅いわよ！ 小町！」

「お、お母さん！」

電話の主は小町の母だ。母親が急に電話をかけてくる時は、何かお小言だと相場が決まっている。だが電話を無視するわけにはいかない。そんなことをしたら、両親揃ってこのマンションまで飛んで来るのは火を見るよりも明らかなのだ。

「……な、何？ どうかした？」

「どうかしたじゃないわよ！ あんた、仕事は決まったの？ お家賃も無駄なんだから、いい加減実家に帰って来なさい！」

「……」

やっぱりお小言だったか。一気に気が重くなった。

勤め先が倒産してからというもの、せつづくように帰って来い帰って来いと言われている。家賃が無駄なのは理解しているが、家に帰ったが最後、自由はなくなる。

一人娘だし、可愛がられているのはわかるのだが、さすがに過保護で過干渉というのは居心地が

悪い。

この電話をどう切り抜けたものかと考えつつ、小町は手に持っていたタオルを握りくり回しながら、ベッドの上に腰を下ろした。

「仕事はまだ……一応、明日また面接を受けることにはなってるケド……」

「そうは言っても、今のご時世なかなかいい仕事はないでしょ。お父さんがあんたにいい話を持ってきてくれたわよ。今日はそれで電話したの」

父親からの話と聞いて、小町はタオルを弄る手を止めた。父親は心配性からくる過保護で、時々とんでもないことを言ってくる。

高校時代、小町の門限は十八時だった。もちろん、決めたのは父親だ。部活で遅くなる日もあるというのに、十八時はあんまりだと抗議したら、逆に十七時に早められた苦い思い出が蘇る。

心配してくれているのはわかるし、ありがたいことなのだが、その心配が嬉しくない方向に向かうのが小町の父だった。

「お父さんが？ なんて？」

小町が尋ねると、母親は意気揚々と話し出した。

「小町ももう二十三歳。今、新しい仕事を探してるみたいだけど、この際だから仕事よりも、小町をお嫁さんにもらってくれる男の人を探したほうがいいんじゃないかって」

「え!？」

小町は咄嗟に驚愕の声を上げていた。同じ「探す」でも、仕事ではなく嫁ぎ先とはどういう理屈だ。

めちやくちやすぎる。

「な、何言ってるの!? 意味わかんないよ! そんなの——」

無理だと言おうとした小町の声は、母親の明るい声に打ち消された。

「お父さんの職場の同僚に、三浦さんって方がいらっしやるの。その方の息子さんが、これまたいい人なんだって! 三浦慎太郎さんっていつてね、外資系の証券会社にお勤めの三十歳。とつてもエリートなんですってよ。どう? 小町。お会いしてみない?」

もう相手の目星まで付けているのか。

聞けば父親同士の酒の席で、互いの子供が独り身なのを嘆き、じゃあ子供同士を会わせようとなつたらしい。

いきなりお見合いのようなことを打診されて、小町はもげそうになるほど強く頭を横に振った。

「え、な、そ、そんな無理! 無理に決まってるじゃない!」

「何を言ってるの! ああ、年が気に入らないのね? 男の人は三十歳からが一番いいの! 頼り甲斐があつていいじゃない。年上のほうが」

年の差に文句を言いたいわけではなく、見合いそのものが無理なのだと言っているのに、母親にはまったく通じていない。

「ち、ちが——」

「慎太郎さんは本当に真面目な人なのよ。仕事一筋。営業のお仕事されてるんですって。忙しくて女遊びなんてする暇ないはずだし。あんたは世間知らずだから知らないかもしれないけれど、外資

のフロントオフィスなんて稼ぎ頭、エリートよ。お給料もすごいし。そんな方と結婚してごらんさい。一生安泰間違いないし。いいからお母さんの言う通りにお会いしなさい!」

初めは「お会いしてみない?」だったのが、いつの間にか「お会いしなさい」に変わっている。

小町がなんと言おうと、その三浦慎太郎なる人物に会わせる気なんだろう。

外資のフロントだから、お金持ちだからなんだというのか。愛はお金では買えない。それに、小町にだって夢がある。素敵な男の人と恋がしたいのだ。お見合いだなんて、恋を強制されているようにどうにも気乗りしない。しかも親の紹介だなんて、真つ平御免だ。

小町は母親の迫力に押されながらも、抵抗した。

小さな小さな声で——

「……い、嫌……」

「小町。あんた、自分の立場をわかっているの?」

打って変わって低くなった母親の声に、小町は身体を縮こまらせた。

これは怒っている時の母親の声だ。もしも目の前にいたなら、正座でお説教コースとなるはず。

「お父さんとお母さんの反対を押し切って、あんな仕方のない会社に就職して! お父さんもお母さんも言ったでしょう? あの会社は業績が怪しいから入っちゃいけないって。なのにあんたはつまらない反発をして! 男の人もそうよ。あんたはどうせ見る目がないんだから、お父さんとお母さんがしっかり相手の方を見て、あんたを幸せにしてくれる人を探してあげます。年を取ってからお見合いしても、いい人に巡り会えるとは限らないのよ? 変な意地なんか張ってないで、お母さ

んの言う通りにしなさい！」

「……」

もうこれ以上言い返す言葉が見つからずに、小町は押し黙ってしまった。

そうなのだ。小町が就職した会社は大手ではあったものの、無理な店舗拡大が仇となつて経営が悪化。それを粉飾決算で誤魔化していたのだ。しかしそれも発覚して、あつという間に倒産。メガバンクに勤めている小町の父は事前に経営難を睨んでおり、そこには就職しないようにと再三言っていた。でも、長年にわたつて抑圧されていた小町は、「就職先くらい自分で決める！」と吹喝を切つて、そこに就職してしまったのだ。

結果は言わずもがな……誰が正しかつたかなんて、結果が熱く物語っている。

あの時、意地を張らずに両親の言うことを聞いて別の会社に就職していたら……今のような状態にはなつていなかったかもしれない。

しかし男の人に対しても、どうせ見る目がないだなんて酷すぎるのではないのか？ 小町はまだ一度も男の人とお付き合いをしたことがないのに。

「と、に、か、く！ これも何かの縁よ。会うだけ会つてみなさい。何も会つてすぐ結婚つてわけじゃないんだから。詳しいことが決まつたらまた連絡するから！ いいわね!？」

——よくない。という小町の気持ちは、はなから聞くつもりなんてないだろう。母親は自分の要件だけを一方的に告げると、そのまま電話を切ってしまった。

「はあ……」

小町は大きなため息をつくとき、背中からベッドに倒れて大の字になった。

どうすればいいんだろう？

(どうするもこうするも……お母さんたちの言うこと聞かないといけないんだろうなあ……)

今まで両親の言うことに間違いはなかった。昔からそうなのだ。間違いがないから小町は従わざるを得ない。それに両親があしろこうしろと口を酸っぱくして言うのは、小町のことを大切に思つて、愛してくれているからなのだ。それはわかるのだが……

もっと信用して選択権をくれてもいいんじゃないだろうか？ もう、二十三歳なのだし、子供扱いしないでほしい。しかし両親は頑なに小町を一人前と認めようとはしない。

家を出ても、小町は未だに両親のいいなりだ。

(まあ……無職じゃ認めろつてほうが無茶だよ……)

自分にそもそも痛い心当たりがあるだけに、強くなることができない。

娘の無職状態を脱却させようという親心なんだというのもわかる。今のご時世、再就職が難しいことも。

「ああああ〜っ……………結婚、か……………」

まだ、二十三歳だ。結婚には早いのではないか。恋だつてろくにすることがないのに。それに親の紹介というのも嫌だ。結婚までのレールが一本、真っ直ぐに敷かれているのが見えるようだ。乗つてしまえば最後、途中下車はできないだろう。

小町にだつて理想の結婚というのがあるのだ。優しい旦那様と、可愛い猫に囲まれた生活。

料理は好きだから毎日旦那様にお弁当を作ってあげたいし、休日は旦那様と一緒に猫と戯れたたい。時々は外にお出掛けもしたい。

——愛する人と幸せになりたい。

将来結婚した時、側にいてくれる男の人はどんな人だろう。ふとそんなことを考えながら目を閉じた時、瞼の裏に浮かんできたのは、今日猫カフェで出会った男の人だった。

(え、いや、なんであの人を?)

初対面の人を相手にと考えるなんて、さすがに飛躍しすぎだ。でも、確かにちよつと好みだったし、いい人に感じたのは事実である。

一本芯が通ったような凛とした雰囲気があった。猫に例えると、無駄な動きはしないで、じつと周りを観察している賢い猫——

(黒猫っぽい感じ)

小町はころんと寝返りを打つと、網膜に映る人影を打ち消すようにリモコンで照明を落とした。

こんなもやもやした気持ちの時は、とつと寝てしまうに限る。親の紹介で男の人に会うことになったって、向こうが自分を気に入るとは限らないじゃないか。逆もしかり。会うだけ会って嫌なら、断ってしまえばいいのだ。

さすがの両親も可愛い一人娘が嫌だと言えば、考え直してくれるはず——たぶん。

小町はパジャマ代わりにしているスウェットの長袖の中に、指を引っ込めた。そしてレギンスを穿いた脚を縮めて、猫のようにきゅーつと身体を丸くし、目を閉じる。昼間たくさん歩いて疲れた

せいか、眠気がじわじわとやってきた。

明日は昼から花屋の面接がある。もう後がない。花は好きだし、ここで再就職を決めたいところだ。でも頭の中にはまだ、母親が話していたお見合いがある。

(お見合いとかやだ……でも……)

お見合いが嫌だと思うこの気持ちは、さつき母親が言っていたように、親への反発心からきているものなのだろうか。自分はまた変な意地を張っているんだらうか。

考えれば考えるほど何が正しいのかわからなくなってくる。

嫌だ嫌だと言いながらも、実は会ってみたら好みのど真ん中で、案外意気投合しちやったりする可能性もあるわけ。

(……あの人みたいな人だったら……わたし……)

小町はうつらうつらと、浅い眠りに誘われていった。

しばらくして背中を優しく誰かに撫でられた気がした。この部屋には小町以外に誰もいないはずなのに、労るような手の温もりを感じる。

たぶんこれは夢なんだろう。不快感はまるでないし、怖くもない。むしろ心地いい。それにこの染み込んでくる温もりを、自分は昔から知っている気がする。

『小町……、小町は結婚するの……?』

低く、囁くような声が背後からする。男の人だ。



覚えのないその声に問いかける。

『あなたは誰？』

『……そうか……小町からは俺がわからないんだ……』

悲しそうな声の彼に申し訳なくなつて、小町は身体を起こして目を開けた。

自分に話しかける彼が誰なのか、確かめなくては。だが振り返って相手の顔を見る前に、背後から包むように抱きしめられる。

夢だからという意識があるお陰か、嫌な気はしなかった。

『いいよ、俺が誰かわからなくても。悲しいけど……仕方ないことなんだろう。でも他の奴と結婚するのは駄目だ。絶対に許さない』

彼はそう言うのと、小町の髪を左肩に寄せ、あらわになつたうなじをちうと吸つてきた。普段人に触れられることのない場所のせいか、妙にゾクゾクして敏感に感じてしまう。

喉の奥で小さく声を上げて眉根を寄せていると、耳に唇を寄せ、息を吹き込むように囁かれた。

『小町……好きだよ』

『!!』

突然の告白に驚く反面、勝手に身体が熱くなつてしまう。彼は小町の胸の前で交差させた手の力を強めた。

『俺はずつと小町が好きだ。長く離ればなれだったけど、俺の気持ちは変わってない。……小町、好きだよ』

ちゅつと首筋に口付けられて、ドキドキと申し訳ない気持ちと同時に湧き起こる。

彼は好きだと言つてくれるのに、自分は彼が誰かもわからないなんて、とんだ薄情者だ。

『ごめんなさい、わたし……』

『謝らないで……何があつても俺が小町を好きな気持ちには変わりはないから』

彼はそう言うのと、首筋からうなじにかけてを、尖らせた舌でちろちろと舐めてきた。くすぐったいが、慰められているようで心地いいものを感じる。小町が少し力を抜くと、突然彼の手が胸を鷲掴みにしてきた。

男の手で二つの乳房がむにむにと揉み上げられ、ブラを付けていない乳房は大きく形を変える。

それなりに大きさがあるせいで、その歪な膨らみは、スウェット越しにも卑猥に見えた。

『あ、あの……やつ……』

小町はか細い悲鳴を上げながら俯いた。

彼は小町の二つの乳首をスウェット越しに摘まみ、くりくりと捏ねてくる。きゅつきゅつと強弱を付けて摘ままれたり、ねじりながら引つ張られたりすると、いつの間にか乳首が硬くしこつてしまった。

『……は、うんつ……』

自分の吐息さえも、どこか悩ましげに聞こえてくる。この声が彼にはどんなふう聞こえているのかと思うと、恥ずかしくてこれ以上吐息を漏らすのも憚られた。

でも不思議なことに、この人に触られるのは、恥ずかしいが嫌いではない。ただ下腹の辺りがじ

くじくしてきて落ち着かないのだ。こんなふうになるのは初めてだった。

『あ、あの……』

『小町、結婚したら相手の男にこんなことされるんだよ？ それはわかってる？ 小町のこの大きな胸もおもちゃにされる。恥ずかしいこともいろいろされるんだよ。身体中を好きに触られるんだ。結婚ってそういうことだよ』

『あ……わ、わたし……』

動揺する小町をよそに、胸を弄いじっていた彼の右手がじわじわと下がって、レギンスの中に入ってきた。しかもショーツのクロッチまで下りてきて、誰にも触られたことのないそこを大胆にも擦り上げてくる。驚いて身を固くすると、彼はクロッチの下で二枚の花弁に包まれている蕾つぼみを、こりこりと指先で引ひつ搔かいてきた。

『他の男が小町に触るなんて——小町が他の男に好きにされるなんて耐えられない……！ 俺はずっと会いたかったんだよ。君が好きで忘れるなんてできなかった。ずっと小町に触りたかった……。だから触ってもいい？』

掠さられ声の彼の囁ささきが切実で、胸が痛い。彼のことを覚えていない申し訳なさど合わさって、完全に彼を拒絶できない自分がいる。

(ど、どうしたら……)

小町が動揺してまともな判断ができなくなっているうちに、クロッチを脇に寄せ、花弁に包まれた割れ目を指先でなぞられる。そしていつの間にか湿ぬってしまったそれを、人差し指でツンツ

ンと突つかれた。その瞬間、ビクツと身体が硬直して動けなくなる。

『あ……小町のここ、濡ぬれてる……小町も俺おれに触ふられたかった？』

『や……』

そんなの知らない。わからない。今まで恋人の一人もいた例たとがないのだ。こんなに身体を触られるのだから初めてなのに。

彼は、顔を真っ赤にする小町の花弁を左右に広げ、濡ぬれた蜜口を上下に擦りはじめた。蜜が伸ばされてすぐ上の蕾に塗り込められる。レギンスの中で行われるその行為は見えないけれど、目に浮かぶようだ。

ベッドの上で両脚を前に投げ出し、背後から男の人に抱かきしめられた状態で身体を弄もられる——  
田を描かきながら蕾を丁寧ていねに愛撫あいぶされると、他のことが考えられなくなっていく。

『あう』

零こぼれた呻うきと共に、蜜口に彼の指先が入ってくる。浅く、ゆつくりと、小町の反応を探るように抜き差しされ、彼の指が動く度に焦これたい疼うきが溜たまる。小町は唇を噛み締めてふるふると震えた。

『あ……小町の中だ……。ああ……あつたかいよ。震ふるえてるね……怖い？ でもここを弄もられると気持ちいいでしょう？』

彼は親指で蕾を触りながら、中の肉襞にくひだを掻かきわけるように優しく弄もってくる。

『もつと？』

『ん……』

曖昧な返事で誤魔化した小町の反応を、彼がどう受け取ったのかわからない。だが彼は左手をスウェットの中に入れ、直接乳房を揉みだした。そして右手の指を更に深く差し込む。しかも、いつの間にか指が二本に増えている。

『ん、っあ……！』

みちみちと内側から広げられる重たい圧迫感が、小町を苛む。肉襞を掻きわけるようにしてお腹の裏を強めに擦られると、じわつと蜜が滲む。その蜜が彼の指の滑りを助けて、くちよんくちよんと湿った音を鳴らした。彼は抽送を速めて、小町の耳朶を吸ってくる。耳穴に湿り気を伴った彼の吐息が吹き込まれ、背中がぞわぞわして腰が浮き上がりそうだ。

自分の身体が彼の指をしゃぶるように蠢いてしまう。

『あ、あ……、や……ふあ……』

『すごいよ、小町。小町の大事な処に俺の指が二本も入ってるよ。あ、締まった。俺の指に中をぐちよぐちよに掻き回されて気持ちいいね？ わかってるよ。ここがいいんだよね？』

彼は耳朶から首筋をれるれると舐めながら、お腹の裏を念入りに弄ってくる。そこは先ほど触られてヒクついたところだ。とてもいやらしい指使いだった。ぐによぐによと蠢きながら、蜜路を出入りして肉襞を湧けさせていく。そうされると目の前がちかちかして、いつの間にか声が漏れていた。

ぐっしよりと濡れた太腿にレギンスが張り付いたのが不快で、脱ぎ去ってしまいたくなる。

『……奥までぐちよぐちよだ……素直でいい子だね……とても可愛いよ。俺の指で気持ちよくなるうね。いっぱい弄ってあげるよ』

彼は小町の中に挿れた指を素早くピストン運動させながら、耳の裏をねつとりと舐めてきた。濡れた処女肉に快感を仕込むように、執拗に内部をまさぐられる。

『あ、あ、あつ、く……ひあ……う……あつい……』

熱い。熱くてとても気持ちいい。身体の中を他人に触られているなんて、恐ろしいことのはずなのに、気持ちよすぎて腰が揺れる。舐め回された耳裏や首筋は、小町の汗と彼の唾液で濡れている。ねつとりと身体に巻きついてくる快感に、溶けてしまいたい。

『結婚したら指だけじゃ済まないんだよ、小町。ここに相手の男のものを挿れられるんだよ……』

突然突き付けられた現実には、身体が強張る。そして同時に、自分の身体の中にある彼の指を締め付けた。

『結婚したら避妊してもらえないかもしれない。中にいっぱい出されちゃうよ。何度も何度も中に出されたら、小町はいつか妊娠するかもしれない。好きでもない男にそんなことされてもいいの？』

『あ……やだあ……やだよ……』

嫌に決まっている。

でも、今この人に触られるのは嫌じゃない。この人だから許している行為を、他の……好きでもない男の人にだなんて！

『嫌だよ。俺も嫌だよ。大好きな小町が他の男のものになるなんて、絶対に嫌だ』